

DAS KAPITAL I  
1867

Karl H. Marx

## 目 次

第一版の序文(マルクス) .....	二
第二版の後書(マルクス) .....	五
フランス語版にたいする序文と後書(マルクス) .....	五 三
第三版に(エンゲルス) .....	三
英語版の序文(エンゲルス) .....	三 二
第四版に(エンゲルス) .....	一

## 第一卷 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣 .....	一
第一章 商品 .....	一
第二節 商品の二要素 使用価値と価値(価値実体、価値の大きさ) .....	一 二
第二節 商品に表わされた労働の二重性 .....	二 三

<b>第三節 價値形態または交換價値</b>	六
<b>A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態</b>	六
一 價値表現の両極、すなわち、相対的価値形態と等価形態	六
二 相対的価値形態	六
a 相対的価値形態の内実	六
b 相対的価値形態の量的規定性	六
<b>B 純体的または拡大せる価値形態</b>	二
一 単純な価値形態の總体	二
二 特別な等価形態	二
三 総體的または拡大された相対的価値形態	二
<b>C 一般的価値形態</b>	二
一 價値形態の変化した性格	二
二 相対的価値形態と等価形態の發展關係	二
三 一般的価値形態から貨幣形態への移行	二
<b>D 貨幣形態</b>	一七

第四節 商品の物神的性質とその秘密 .....	一元
第二章 交換過程 .....	一至二
第三章 貨幣または商品流通 .....	一至三
第一節 價値の尺度 .....	一六
第二節 流通手段 .....	一七
a 商品の変態 .....	一全
b 貨幣の流通 <small>(クマラク)</small> .....	一〇三
c 銀貨 價値標準 .....	一八
第三節 貨幣 .....	三七
a 貨幣退蔵 .....	三七
b 支払手段 .....	三七
c 世界貨幣 .....	四六
第二篇 貨幣の資本への転化 .....	一五
第四章 貨幣の資本への転化 .....	一五
第一節 資本の一般定式 .....	一五
第二節 一般定式の矛盾 .....	一七

第三節 労働力の買いと売り

一五〇

カ  
リードル・マ  
リヒ・エル  
ンゲルス 編著

資

本

経済学批判

論



わが忘れえぬ友  
プロレタリアートの大膽忠実にして  
高貴なる選士

ヴィルヘルム・ヴァルフ

に捧ぐ

一八〇九年六月二一日タルナウに生まれ、  
一八六四年五月九日亡命のうちにマンチエスターに逝く



## 第一版の序文

この著作は、一八五九年に公けにした私の著書『経済学批判』の続きであつて、私はここにその第一巻を読者に提供する。初めに出したものとこの続篇との間には永い中絶を余儀なくされたが、これは私の永年にわたる病気が、私の仕事をいくたびか中断させたからである。

右の旧著の内容は、この第一章に要約されている。この要約は、関連を明らかにし遗漏のないことを期すだけのためにしたわけではない。叙述が改善されたのである。事情が許すかぎりは、以前にただ示唆しただけに終わっている多くの点が、ここではくわしく述べられている。他方、逆に旧著で詳細に述べたところが、この著ではわずかに示唆だけにとどまっているばかりもある。価値理論と貨幣理論の歴史にかんする諸節は、新著ではもちろん全部除いた。しかし、旧著の読者は、第一章の注で、これらの理論の歴史にたいする新たな資料が提供されているのを見られるであろう。

何事も初めがむずかしい、という諺は、すべての科学にあてはまる。第一章、とくに商品の分析を含んでいる節の理解は、したがつて、最大の障害となるであろう。そこで価値実体と価値の大きいさとの分析をより詳細に論ずるにあたつては、私はこれをできるだけ通俗化することにした。<sup>二\*</sup>

完成了した<sup>すがた</sup>態容を貨幣形態に見せてゐる価値形態は、きわめて内容にとぼしく、単純である。ところが、人間精神は二〇〇〇年以上も昔からこれを解明しようと試みて失敗しているのに、他方では、これよりはるかに内容豊かな、そして複雑な諸形態の分析が、少なくとも近似的には成功しているというわけである。なぜだろうか？ でき上った生体を研究するのは、生体細胞を研究するよりやさしいからである。そのうえに、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学的試薬も用いるわけにいかぬ。抽象力なるものがこの両者に代わらなければならぬ。しかしながら、ブルジョア社会にとつては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態は、経済の細胞形態である。素養のない人にとっては、その分析はいたずらに小理屈をもてあそぶように見えるかもしれない。事実上、このばい問題のかかわるところは細密を極めている。しかし、それは、ただ顕微鏡的な解剖で取扱われる問題が同様に細密を極めるのと少しもちがつたところはない。

(一) F・ラッサールのシュルツエリーリッヂを駁した書の一節は、おのずからそれらの諸問題にかんする私の論述の「精神的精髄」を再現したにとどまるものであることを声明しているのだが、この一節する重大な誤解を含んでいるだけに、この通俗化がなおさら必要と思われたのであった。ついでながら、F・ラッサールは、彼のいろいろな経済的労作の、例えば資本の歴史的性格、生産諸関係と生産様式との関連、等々にかんするすべての一般的理論的命題を、ほとんど言葉どおりに、私の案出した専門用語にいたるまで、私の諸著からとり、しかも典拠をかかげていないのであるが、こうしたやり方は、おそらく宣伝の点を顧慮してそうせざるをえなかつたのである。もちろん私は彼の細部の論述や適用方法について述べ

いるのではない。これらのこととは私の少しもかんするところではないのである。

\* 「通俗化することにした」という文句と「完成した<sup>すがた</sup>態容……」の間に、第一版には左のような一節がある。この一節は再版以後に収められた第一版序文では取除かれている。モスクワの「マルクス・レーニン主義研究所」版（アドラツキー版）、ディーツ版にも省かれている。もつとも、第二版以後では本文の叙述が改められ付録がなくなっている。

「価値形態の分析においては事情は異なる。それは、弁証法が最初の叙述におけるよりはるかに鋭くあらわれているから、理解に困難である。だから、私は、弁証法的思考にあまり慣れていない読者には、一五ページ（上から一九行目）から三四ページの終わりまでの一節をすっかり省略すること、そのかわりに、この巻に付け加えられている付録“価値形態”を読むことをすすめる。そこでは問題をその科学的な言い方が許すかぎり簡単に、また学校教師風にすら叙述しようと試みてある。付録を読み終わつたならば、読者は再び三五ページから本文を読み続けられたい。」——訳者。

したがって、価値形態にかんする節を除けば、この書には、難解だという非難を受けるようなところがあるとは思えない。私はむろん、何か新しいことを学び、したがつてまた、自分で考えようと志す読者を想定しているのである。

物理学者は自然過程をこういうふうに観察する。すなわち、自然過程がもつとも的確な形態で、攪乱的影響によつて混濁されることもつとも少なく現われるばあいをとるか、あるいは可能なばあいには、実験を、過程の純粹な進行が確保される条件のもとで、行なうのである。私がこの著

作で探究しなければならぬものは、資本主義的生産様式であり、これに相應する生産諸関係および交易諸関係である。その典型的な場所は、今日までのところイギリスである。これが、私の理論的展開のおもな解明になぜイギリスを用いるかの理由である。だが、ドイツの読者がパリサイの徒のようにイギリスの工業労働者や農業労働者の状態について肩をすくめ、あるいはそれと同時に、樂観的に、ドイツではことはまだ永い間そんなに悪化はしないのだといってみずから慰めているとすれば、私は彼にこう呼びかけなければならない。De te fabula narratur ! [ル]で報告しているのは君のことなのだよ！」と。

それ自体としては、問題は、資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的敵対関係の発展程度の高いか低いかということにあるのではない。問題として取扱うのは、これらの法則自体であり、鉄の必然性をもって作用し、そして貫徹するこれらの傾向なのである。産業的により発達している国は、発達程度のより低い国にたいして、その国自身の未来の像を示すだけのことである。だが、このことはいまは論じないことにしよう。資本主義的生産がわが国で完全に根を下ろしているところ、例えほんとうに工場といえるところでは、状態はイギリスにおけるよりはるかに悪い、というのは、これに対抗する工場法が欠けていたからである。あらゆる他の部面で、他のすべての西ヨーロッパ大陸と同じように、われわれを悩ましているのは、ただ資本主義的生産の発達ということだけではなく、その発達が不充分であるということでもあるのである。近代的窮迫とともに一連の前代から受けついだ窮迫がわれわれを圧迫している。それは、古くさい旧式

となつた生産様式が、その反時代的な社会的、政治的諸関係の付隨物をともなつて残つていると  
いうことから生ずるものなのである。われわれは生者に悩まされているだけでなく、死者によつ  
ても悩まされているのである。*Le mort sait le vit!* 「死者が生者をとらえる！」

ドイツや他の西ヨーロッパ大陸の社会統計はイギリスのそれに比較すると貧弱である。それでも、それらの統計は、まさにその背後にメドウサの頭がかくされているのを感じかせる程度には、面紗をめくっている。もしわが政府や議会が、イギリスにおけると同じように、経済状態について定期的に調査委員会を任命し、もしこれらの委員会が眞実を究明するためにイギリスにおけると同一の絶対権限を賦与されるとすれば、さらにもしこの目的のために、イギリスの工場監督官たちや、*“Public Health”*〔公衆衛生〕にたいするイギリスの医務報告者や、女工や幼年工の搾取や居住状態や栄養状態等々にたいするイギリスの調査委員などのように、専門知識をもち公平で容赦なき人々を得るとすれば、われわれは、われわれ自身の状態を見て驚愕するだろう。ペルセウスは、怪物を追跡するために、魔帽を必要とした。われわれは、魔帽を深く眼や耳を蔽うほどにかぶりでもしない以上、この魔物の存在を否認するわけにはいくまい。

人はこのことについて思いちがいをしてはいけない。一八世紀のアメリカ独立戦争がヨーロッパの中産階級にたいして警鐘を打つたように、一九世紀のアメリカの内乱は、ヨーロッパの労働者階級に対しても警鐘を打ちならしている。イギリスでは、変革過程は手で擗むばかりに具体的になつてゐる。それは、一定の高さに達すると、大陸に衝撃となつて帰つてくるに相違ない。この

変革過程は、大陸では、労働者階級自身の発達の程度にしたがつて、より殘虐な形態をとつて動くこともあるれば、より和やかな形態で動くこともあるだろう。だから、より高級な動機は別としても、現在支配的地位にある階級にたいして、彼ら自身の利益が命じていることは、労働者階級の發展をはばんでいる一切の法的に撤去できる障害を除去することである。そのために、私は、とくにイギリスの工場立法の歴史と内容と結果にたいして、この巻の中でできるだけ詳細な叙述を插入しておいた。一国民は他の国民から学ぶべきものであるし、また学びうるものである。一方社会がその運動の自然法則を究知したとしても——そして近代社会の経済的運動法則を<sup>せんめい</sup>闡明することがこの著作の最後の究極目的である——、この社会は、自然の発達段階を飛び越えることもできなければ、これを法令で取除くこともできない。しかしながら、社会はその生みの苦しみを短くし、緩和することはできる。

起こりうる誤解を避けるために一言しておく。私は、資本家や土地所有者の姿を決してバラ色の光で描いていない。しかしながら、ここでは、個人は、経済的範疇の人格化であり、一定の階級関係と階級利害の担い手であるかぎりにおいてのみ、問題となるのである。私の立場は、経済的な社会構造の發展を自然史的過程として理解しようとするものであつて、決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするのではない。個人は、主觀的にはどんなに諸関係を超えていっていると考えていても、社会的には畢竟その造出物にはかならないものであるからである。

経済学の領域においては、自由なる科学的研究は、他のすべての領域におけると同様の敵に遭

遇するだけではない。経済学の取扱う素材の特有の性質は、もつとも激しいもつとも狹量なそしてもつとも憎惡にみちた人間胸奥の激情である、私利という復讐の女神を挑発する。例えば、イギリスの高教会派は、その三十九カ信条のうち三八にたいする攻撃には我慢できるが、その貨幣収入の三九分の一にたいするそれには我慢できない。今日では、無神論は、受けつがれた所有関係の批判と比較すれば、一つの culpa levis〔軽い罪〕であるといってよい。だが、ここに進歩は見紛うべくもない。たとえば最近数週間に発表された青書『帝国海外派遣員通信、産業問題および労働組合について』の参考を乞いたい。イギリス国王の海外代表者たちは、ここで露骨な言葉でこう述べている、すなわち、ドイツ、フランス、要するにヨーロッパ大陸の全文化諸国において、資本と労働の現在の諸関係の変化が、イギリスと同じように切実となり、同じように不可避となつてゐる、と。同時に大西洋の彼方では、北アメリカ合衆国の副大統領ウエード氏は、いくつかの公開の会合で、奴隸制撤廃の後には、資本諸関係と土地所有諸関係の変化が日程にのぼつてきた！と述べている。紫の衣や黒い僧衣でかくしあおせないということ、これが時代の徵候である。この徵候は明日にでも奇跡が起ころうということを意味してはいない。それは、支配階級のうちにいてすら、現在の社会が堅い結晶体でなく、変化しうるもので、不斷に変転の過程をたどっている有機体であるということが、ほのかに感じられはじめているのを示すものである。本書の第二巻は、資本の流通過程(第一冊)と総過程の形成(第三冊)を、最後の第三巻(第四冊)は、理論の歴史を取扱うことになっている。

私は科学的な批判ならどんな批評でも歓迎する。いわゆる世論なるものには少しも譲歩しなかつたのであるが、その偏見にたいしては、依然として偉大なるフイレンツエ人の格言が私のそれである。

Segui il tuo corso, e lascia dir le genti ! [汝の道を行け、そして人々の語るにまかせよ！]

ロンドン 一八六七年七月二十五日

カール・マルクス

第一卷 資本の生産過程



# 第一篇 商品と貨幣

## 第一章 商 品

### 第一節 商品の二要素 使用価値と価値 (価値実体、価値の大きさ)

資本主義的生産様式の支配的である社会の富は、「巨大なる商品集積」として現われ、個々の商品はこの富の成素形態として現われる。したがって、われわれの研究は商品の分析をもつて始まる。

(一) カール・マルクス『経済学批判』ペルリン、一八五九年、三ページ〔ディーツ版『全集』第一三巻、一五ページ。岩波文庫版、二二ページ。新潮社版『選集』第七巻、五七ページ〕。

商品はまず第一に外的対象である。すなわち、その属性によって人間のなんらかの種類の欲望を充足させる一つの物である。これらの欲望の性質は、それが例えば胃の腑から出てこようと思像によるものであろうと、ことの本質を少しも変化させない。<sup>(2)</sup> ここではまた、事物が、直接に生活手段として、すなわち、享受の対象としてであれ、あるいは迂路をへて生産手段としてであれ、

いかに人間の欲望を充足させるかも、問題となるのではない。

(二) 「願望をもつということは欲望を含んでいる。それは精神の食欲である。そして身体にたいする飢餓と同じように自然的のものである。……大多数(の物)が価値を有するのは、それが精神の欲望を充足させるからである」(ニコラス・バーボン『新貨幣をより軽く改鑄することにかんする論策』。ロック氏の「考察」に答えて)ロンドン、一六九六年、二・三ページ)。

鉄、紙等々のような一切の有用なる物は、質と量にしたがって二重の観点から考察されるべきものである。このようなすべての物は、多くの属性の全体をなすのであって、したがって、いろいろな方面に役に立つことができる。物のこのようないろいろの側面と、したがってその多様な使用方法を発見することは、歴史的行動である。<sup>(三)</sup> 有用なる物の量をはかる社会的尺度を見出すこともまたそうである。商品尺度の相違は、あるばあいには測定さるべき対象の性質の相違から、あるばあいには伝習から生ずる。

(三) 「物は内的な特性<sup>verteue</sup>」(これはバーボンにおいては使用価値の特別な名称である)「をもつてゐる。物の特性はどこに行っても同一である。例えば、磁石は、どこにいっても鉄を引きつける」(前掲書、六ページ)。磁石の鉄を引きつける属性は、人がその性質を利用して磁極性を発見するにいたって初めて有用となつた。

一つの物の有用性(すなわち、いかなる種類かの人間の欲望を充足させる物の属性)。——カウツキー版】は、この物を使用価値にする。<sup>(四)</sup> しかしながら、この有用性は空中に浮かんでいるもの

ではない。それは、商品体の属性によって限定されていて、商品体なくしては存在するものではない。だから、商品体自身が、鉄、小麦、ダイヤモンド等々というように、一つの使用価値または財貨である。このような商品体の性格は、その有効属性を取得することが人間にとつて多くの労働を要するものか、少ない労働を要するものか、ということによってきまるのではない。使用価値を考察するに際しては、つねに、一ダースの時計、一エレの亞麻布、一トンの鉄等々というように、それらの確定した量が前提とされる。商品の使用価値は特別の学科である商品学<sup>(五)</sup>の材料となる。使用価値は使用または消費されることによってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態の如何にかかわらず、富の素材的内容をなしている。われわれがこれから考察しようとしている社会形態においては、使用価値は同時に——交換価値の素材的な扱い手をなしている。

(四) 「あらゆる物の自然価値 natural worth とは、必要な欲望を充足させ、あるいは人間生活の快適さに役立つ、物の適性のことである」(ジョン・ロック『利子低下の諸結果にかんする若干の考察』一六九一年、『著作集』版、ロンドン、一七七七年、第二巻、二八ページ)。一七世紀において、まだしばしばイギリスの著述家の間に "Worth" を使用価値の意味に、"Value" を交換価値の意味に、用いるのが見られる。全く、直接的の事物をゲルマン系語で、反省的事物をローマン系語で言い表わすことを愛する言語の精神にもとづくのである。

(五) ブルジョア社会においては、すべての人は商品の買い手として、百科辞典的商品知識をもっているといふ法的擬制 *fictio juris* が、当然のことになっている。

\* アドラツキー版では、売り手、エルンゲルス版・カウツキー版・英語版・フランス語版およびディーツ版ではすべて、買い手、となっている。——訳者。

交換価値は、まず第一に量的な関係として、すなわち、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される比率として、すなわち、時と所とにしたがって、たえず変化する関係として、現われる<sup>(六)</sup>。したがって、交換価値は、何か偶然的なるもの、純粹に相対的なるものであつて、商品に内在的な、固有の交換価値(valeur intrinsèque)というようなものは、一つの背理<sup>(七)</sup>contradiction in adjecto のように思われる。われわれはいのことをもつと詳細に考察しよう。

\* カウツキー版では、偶然の、となつてゐる。——訳者。

(六) 「価値は一つの物と他の物との間、一定の生産物の量と他のその量との間に成立する交換関係である」(ル・トゥロース『社会的利益について』『重農学派』デール版、パリ、一八四六年、八八九ページ)。

(七) 「どんな物でも内的価値と云ふようなものをもつことはできない」(Z・バーボン『新貨幣をより軽く改鑄することにかんする論策』六ページ)、またはバットラの「うように、  
「物の価値なるものはそれがちょうど持ち来すだけのものである。」

一定の商品、一クオーターの小麦は、例えば、x量靴墨、またはy量絹、またはz量金等々と、簡単にいえば他の商品と、きわめて雑多な割合で交換される。このようにして、小麦は、唯一の交換価値のかわりに多様な交換価値をもつてゐる。しかしながら、x量靴墨、同じくy量絹、同じくz量金等々は、一クオーター小麦の交換価値であるのであるから、x量靴墨、y量絹、z量

金等々は、相互に置換えることのできる交換価値、あるいは相互に等しい大きいさの交換価値であるに相違ない。したがって、第一に、同一商品の妥当なる交換価値は、一つの同一物を言い表わしている。だが、第二に、交換価値はそもそもただそれと区別さるべき内在物の表現方式、すなわち、その「現象形態」でありうるにすぎない。

さらにわれわれは二つの商品、例えば小麦と鉄とをとろう。その交換関係がどうであれ、この関係はつねに一つの方程式に表わすことができる。そこでは与えられた小麦量は、なんらかの量の鉄に等置される、例えば、「クォーター小麦 = ハーフペントネル鉄」というふうに。この方程式は何を物語るか？ 二つの異なる物に、すなわち、一クォーター小麦にも、同様に  $a$  ペントネル鉄にも、同一大いさのある共通なものがあるということである。したがって、両つのものは一つの第三のものに等しい。この第三のものは、また、それ自身としては、前の二つのもののいずれでもない。両者のおおのは、交換価値であるかぎり、こうして、この第三のものに整約しうるのでなければならない。

一つの簡単な幾何学上の例がこのことを明らかにする。一切の直線形の面積を決定し、それを比較するためには、人はこれらを三角形に解いていく。三角形自身は、その目に見える形と全くちがった表現——その底辺と高さとの積の二分の一——に整約される。これと同様に、商品の交換価値も、共通あるものに整約されなければならない。それによって、含まれるこの共通なるものの大小が示される。

この共通なものは、商品の幾何学的、物理学的、化学的またはその他の自然的属性であることはできない。商品の形体的属性は、本来それ自身を有用にするかぎりにおいて、したがつて使用価値にするかぎりにおいてのみ、問題になるのである。しかし、他方において、商品の交換関係をはつきりと特徴づけているものは、まさに商品の使用価値からの抽象である。この交換関係の内部においては、一つの使用価値は、他の各使用価値と、それが適当の割合にありさえすれば、ちょうど同じだけのものとなる。あるいはかの老バーボンが言っているように、「一つの商品種は、その交換価値が同一の大いさであるならば、他の商品と同じだけのものである。このばかり同一の大いさの交換価値を有する物の間には、少しの相違または差別がない。」

(八) 「一商品種は、もし価値が同一であれば、他の商品種と同じものである。同一価値の物には相違も差別も存しない。……一〇〇ポンドの価値のある鉛または鉄は、一〇〇ポンドの価値ある銀や金と同一の大いさの交換価値をもつてゐる」(N・バーボン、前掲書、五三・五七ページ)。

使用価値としては、商品は、何よりもまず異なれる質のものである。交換価値としては、商品はただ量を異にするだけのものであって、したがつて、一原子の使用価値をも含んでいない。いまもし商品体の使用価値を無視するとすれば、商品体に残る属性は、ただ一つ、労働生産物という属性だけである。だがわれわれにとつては、この労働生産物も、すでにわれわれの手中で変化している。われわれがその使用価値から抽象するならば、われわれは労働生産物を使用価値たらしめる物体的な組成部分や形態からも抽象することとなる。それはもはや机でも家でも燃糸

でも、あるいはその他の有用な何物でもなくなっている。すべてのその感覚的性質は解消している。それはもはや指物勞働の生産物でも、建築勞働や紡織勞働やその他なにか一定の生産的勞働の生産物でもない。勞働生産物の有用なる性質とともに、その中に表わされている勞働の有用なる性質は消失する。したがって、これらの勞働の異なった具体的な形態も消失する。それらはもはや相互に区別されることなく、ことごとく同じ人間勞働、抽象的に人間的な勞働に整約される。われわれはいま勞働生産物の残りをしらべて見よう。もはや、妖怪のような同一の対象性以外に、すなわち、無差別な人間勞働の、言いかえればその支出形態を考慮することのない、人間労働力支出の、單なる膠状物というもの以外に、勞働生産物から何物も残っていない。これらの物は、ただ、なおその生産に人間労働力が支出されており、人間労働が累積されているということを表わしているだけである。これらの物は、お互いに共通な、この社会的実体の結晶として、価値——商品価値である。

商品の交換関係そのものにおいては、その交換価値は、その使用価値から全く独立しているあるものとして、現われた。もしいま実際に勞働生産物の使用価値から抽象するとすれば、いま規定されたばかりの労働生産物の価値が得られる。商品の交換比率または交換価値に表われている共通なものは、かくて、その価値である。研究の進行とともに、われわれは価値の必然的な表現方式または現象形態としての交換価値に、帰ってくるであろう。だが、この価値はまず第一に、この形態から切りはなして考察せらるべきものである。

このようにして、一つの使用価値または財貨が価値をもっているのは、ひとえに、その中に抽象的人間的な労働が対象化されているから、または物質化されているからである。そこで、財貨の価値の大きさはどうして測定されるか？ その中に含まれている「価値形成実体」である労働の定量によつてである。労働の量自身は、その継続時間によつて測られる。そして労働時間には、また時、日等のような一定の時間部分としてその尺度標準がある。

もある商品の価値が、その生産の間に支出された労働量によつて規定されるならば、ある男が怠惰であり、または不熟練であるほど、その商品は価値が高いということになりそうである。だといふのは、その商品の製造に、この男はそれだけより多くの時間を必要とするからである。だが、価値の実体をなす労働は、等一の人間労働である、同一人間労働力の支出である。商品世界の価値に表わされている社会の全労働力は、ここにおいては同一の人間労働力となざる、もちろん、それは無数の個人的労働力から成り立っているのであるが。これら個人的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働力の性格をもち、またこのような社会的平均労働力として作用したがつて、一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間をのみ用いるというかぎりにおいて、他のものと同一の人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現に存する社会的に正常な生産諸条件と労働の熟練と強度の社会的平均度とをもつて、なんらかの使用価値を造り出すために必要とされる労働時間である。例えば、イギリスに蒸気織機が導入されたのちには、一定量の撚糸を織物に変えるために、おそらく以前の半ばほどの労働